はじめに

めまぐるしく変化した平成の時代が終わりを告げようとしている。この 30 年を思い返してみると、その変化のスピードは、私たちの想像をはるかに超えるものがある。インターネットや携帯電話の普及、そしてその２つの機能を併せもったスマートフォンの登場。コンピュータも飛躍的に進化した。平成がスタートした頃は、デスクトップ型がほとんどで、ＣＰＵの性能が低いため、処理に時間がかかり、メモリの容量もＭＢなどと小さく、動画などは保存が難しい状況であった。それが現在はどうであろう。ＣＰＵの性能が飛躍的に向上し、メモリもＴＢなどという想像を絶するものも登場している。そして、現在の花形はＡＩ（Artificial　Intelligence）人工知能である。ロボットや自動車の制御などをはじめ、私たちの身近な生活にＡＩが急速に進出してきている。

そのような激しい社会の変化の中、「今の子どもたちの 65％は、今ない職業に就く」、「10～20 年後、約 47％の仕事は自動化される」という有識者の声もある。現時点では想像することすら難しいことではあるが、そのようなことが仮に現実に起こるとすると、私たち教師は目の前の子どもたちに、どのような力を身に付けさせればよいのか・・・。悩ましいところであるが、それを考えるヒントがいくつかある。

その一つ目。脳科学者の茂木健一郎さんによると、人間が人工知能に勝るものが５つあるという。列挙すると、①コミュニケーション　②身体性　③発想・アイデア　④直感・センス　⑤イノベーション（新しいものを生み出す）であるらしい。また、ある進学校の校長は言っている。「進学校なので、当然成績を上げることや志望校に合格することを目標としています。しかし、それは第一目標ではありません。自分で考え、自分で計画を立て、自分で学べるように育てていくのが、第一目標なのです。」

また、ある大学教授は「今教えている知識だけでは、子どもたちの生活に活かすことはできないかもしれない。そう考えると、大切なのは『学ぶことを学ぶ』ということだと思います。そのためには、私は「学ぶことを楽しむ」必要があると思っています。でなければ学び続けられないでしょうから。ぜひ先生方には、固定概念を外し、新しいことに挑戦していただきたい。」と言っている。科学技術の進歩に伴う社会の変化や、プログラミング教育をはじめとする学習内容の変化に、私たち教員は立ち向かっていかなければならないのである。

前置きが長くなったが、そのような中、今年度「視聴覚教育委員会」と「情報教育委員会」が統一され、「視聴覚・情報教育委員会」がスタートした。序論の話を待つまでもなく、両委員会とも時代の花形となる分野である。正直そのような２つの委員会が統一されて、うまくいくのだろうかという不安もあったし、両委員会が長年かけて蓄積してきたものをうまく融合させれば、今までにない素晴らしいものが出来上がるのではないかという期待もあった。そんな複雑な思いの中スタートした平成 30 年度であったが、いらぬ心配は無用であった。両委員会のメンバーが、連携または切磋琢磨し、より良いものを構築していこうという気概のもと、年間を通してさまざまな活動に取り組んだ。その象徴が、夏季休業中に実施した「愛媛県視聴覚・情報教育研修会」である。約 100 名の参加者のもと、講演、ワークショップ等内容も時代に即したもので、盛会のうちに研修会を終えることができた。その他、県外出張等にも多数参加していただき、研修を深めていただくことができた。

そのような１年間の歩みの集大成となるのが、本研究紀要である。各支部及び県全体の活動報告、各研究会参加報告、実践事例、実態調査等内容も豊富であるし、今後につながる成果や課題も満載である。お互いの研究成果を共有し、次へのステップに役立てていただければ幸いである。

最後に、ご指導いただいた関係機関の皆様、原稿をお寄せいただいた先生方、編集にご尽力いただいた先生方に心よりお礼を申し上げたい。